

失われた絆 もう一度

2月上旬の昼下がり、岩手県大槌町の仮設団地集会所。いすを並べて車座になっているのはお年寄り6人だ。両腕を伸ばしたり腰をひねったり。最後は歌いながら全身を動かした。

国際医療ボランティアAMDA（岡山市）が大槌町に置いた支援拠点「大槌健康サポートセンター」主催の健康体操教室。町内48の仮設団地を対象に週1回、2カ所を巡回する。

体操が終わると、お茶や菓子を楽しむ「お茶っこ」のひととき。この日は津波を見た時の驚き、食料が少なかった避難所のつらさが話題になった。

「仮設住宅は狭く、運動不足になりがち。普段、口にしづらいことを吐き出して心も楽にしてもらおう」。体操を指導したセンターのスタッフ、菅谷安美さん(25)は言う。健康体操教室の目的はもう一つある。

仮設団地は震災後に急造され、入居の申請書には「第9希望」まで書く欄があった。望みは必ずしもかなわず、結果的に地域コミュニティは分断された。

孤立すれば孤独死や自殺を招きかねない。大槌町はいまだ人口の2割以上が仮設暮らし。親睦を深め、助け合う契機にとの願いを、教室に託しているという。



4 共同体の分断

復興 道半ば

震災5年 岩手・大槌からの報告

「仮設団地は知らない人ばかり。最初は どうしていいか、戸惑った」

健康体操教室に参加する鈴木ヒロさん(75)は津波で自宅を流され、その年の7月、仮設団地へ入った。以前のお隣さんとは離れ離れ。スーパーや病院でたまに出くわすぐらいだ。

団地では顔を合わせた住人に「おはよう」「こんにちは」と、あいさつするよう心掛けた。健康体操教室など集会所でのイベントにも積極的に足を運び、友人は少しずつ増えた。

「大切な人や家を失って言葉にならない思いを抱えた者同士、自然に心が通じ合った」と鈴木さん。

ただ、仮設団地はいずれ退去する。自宅があった場所が公共施設の建設が予定

「伝統を大事にする大槌町民にとって郷土芸能は絆のシンボル」と小石さんは言う。1月31日、大槌町



地域に伝わる郷土芸能を復活させた。

「私たちはあまりに多くのものを震災に奪われた。せめて人のつながりだけは元に戻したいと思った」

津波で母親が行方不明になり、姉とおいは亡くなった。自分が副代表を務める町指定無形民俗文化財・城内大神楽保存会のメンバーも多くが犠牲になり、難を逃れた人は仮設への入居で散り散りに。「このままでいいのか」。居ても立ってもいられなくな

生き残ったメンバーの所在を一年がかりで突き止めた。津波で流されたり壊れたりした獅子頭や太鼓も作り直した。神楽の再開にこぎ着けたのは震災翌年、2012年の秋祭りだった。

「活力に満ちた郷土芸能は舞い手も観客も心がほっこり温かくなる。その時だけは何もかも忘れられる」

「温かさ」は震災の悲しみさえも、少しの間だけ拭ってくれるという。

あまりに多くのものを奪われた。せめて…